

## フッサールのモナド論<sup>(1)</sup>

### Monadologie bei Husserl

田 中 康 司

我々は、自然的態度において、「私は在る」、「世界は在る」、「他者は在る」という確信のもとで、様々な知を形成しつつ生きているが、この態度において、これらの確信それ自身が主題化されることはできない。現象学的還元のみが、我々をこれらの確信を遂行している絶対的自我へ連れ戻すことによって、これらの確信それ自身を主題化することができるのである。本稿の目的は、これら三つの確信がいかに成立しているかをそれぞれ説明することで、この三者が互いに制約しあいながら機能していることを明らかにし、それを介して現象学が開示する究極的次元のロゴスを説明することである。

一

還元がそこへと導く自我、すなわち「還元の第一の『エゴ』」(XV, 586)である絶対的自我は、フッサールによれば、「どのような意味においても複数化を許さず……そのような複数化を無意味なものとして閉めだす、絶対的意味において唯一的なエゴ」(XV, 589f)であり、「これに対して他のエゴがいかなる意味も与えない故に、

虚偽のエゴと呼ばれる」(XV, 586)エゴである。この絶対的自我は「危機」においては「原・自我 (Ur-Ich)」と呼ばれ「その唯一性と人称不変性を決して失うことはない」(VI, 188)とされる。

従って、この絶対的自我は、自我という語を使わずに語られることも多い。例えばフッサールは次のように言う。「反省し分析する自我は、流れること(Stromen)のうちに、己れの先存在 (Vorsein)をもつ」(XV, 584)。「私は絶えず、そこにおいて私が能力的に働きつつ存在する、流れることの絶対的で原初的な先存在を注視している」(XV, 585)。ここでは絶対的自我は、「流れること」や「流れることの絶対的で原初的な先存在」と呼ばれているのである。そしてこの絶対的自我は、前者の引用からわかるように、反省そのものの成立根拠であり、反省の限界として絶対的事実なのである。

我々は、これから、絶対的自我の自己意識を問うため、フッサールの反省論を見ていくことにする。フッサールは、反省そのものの成立根拠を問うために、「究極的な還元(die letzte Reduktion)」を遂行する。その所以は次の通りである。反省において私は、反省している私と反省されている私に分裂している。そしてこの両者の同一性が確かめられるのは、より高次の反省によってであり、それは本来的に「後からの確認(Nachgewahren)」(VIII, 89)でしかない。ではこの後から確認している私と先の二つの私の同一性かというと、更により高次の反省によってしか確かめられない。こうして反省による同一性の確認は無限後退に陥ってしまうのである。これは反省というものが、能動的な時間化 (Zeitigung) であって、その対象に時間様相を付与せざるをえないからである。

フッサールは、この無限後退を克服する次元を開示するために「あらゆる能動性の禁止」であり「素朴性の究極的克服」(XV, 585)である究極的な還元を遂行するのである。そしてこの究極的な還元とは「観取する眼差

を、絶対的な原初的生、原初的我<sub>1</sub>在り、流れること、原受動的に流れること、流れつつ流れ去ることとしての自我の活動、……この同一化活動の能力としての自我の活動、自我の同一化することに向ける」(XV, 585) ことなのであり、「流れることの絶対的で原初的な先存在」を注視することなのである。この先存在は、先の引用「反省し分析する自我は、流れることのように、己れの先存在をもつ」からわかるように、反省し分析する自我の先存在を含蓄しているのである。先存在の先 (Vor) とは、反省に先立つということなのである。従って究極的還元は、先反省的次元において、流れることと先存在と、そこに繰り返りこまれていく反省する自我そのものの先存在すなわち究極的な還元を遂行する自分自身を、見出すのである。流れることとそれを注視する自我の関係は、従って、差異性における同一性であり、同一性における差異性であり、一言でいえば原初的距離性 (Urtauzanz) なのである。この反省に先立つ原初的距離性こそが、反省における自我分裂を成立せしめるのであり、かつ両自我の同一性を保証するのである。このような流れることの絶対的自我の先反省的構造は、すなわち先時間的構造であって、従ってフッサールは、「絶対的『エゴ』は非時間的である」(XV, 587) と言うのである。それ故フッサールは、或る箇所、この絶対的自我の構造を「流れる生き生きとした現在」と特徴づけることさえ禁じている。なぜなら現在について語ることは、時間様相について語ることにつながるからである。フッサールは、かわりに「絶対的に超越論的な自我の原初的なすなわち絶対的で根源的に流れる生」として特徴づけるのである (XV, 584)。

還元によって究極的に開示される絶対的自我は、唯一的でありながら、非時間的に自己を差異化させ、自己との間に原初的距離をとる流れることそのものなのである。言いかえれば、それは、自己を差異化させながら唯一的であるような流れることなのである。絶対的自我の自己意識は、この流れることの非時間的自己分裂に

おける、自己の自己に対する自己告知のことなのである。そしてこれは、あらゆる能動性を禁止したときにも成立している故に、受動的自己意識とも呼ばれ得るのである。

## 二

流れることの絶対的事実は、非時間的に自己を分裂させつつ唯一的事実である原初的生なのである。そしてこの自己分裂の構造が、反省（における自我分裂と両自我の同一性）を成立せしめるのであり、反省し分析する自我は、己れの先存在を、この流れることのうちにもつのである。このような流れることの原構造について、フッサールは、「遡って問うとき、最終的に、原キネステーズ、原感情、原本能を伴う原ヒュレーの変転において、原構造が明らかになる」(XXV, 385)と言う。我々は本章では、この原ヒュレー (Urhyte) を手がかりにして、「世界は在る」という確信すなわち世界信念を問うていくことにする。

ヒュレーとは、フッサールにおいて感覚のことを言うのであり、ヒュレー野とは感覚野のことである。この感覚野を支配する根本法則は連合 (Assoziation) である。この連合の法則によって、同質的なものは融合され、異質なものは対照させられる。例えば「白い背景の上の赤い斑点」の場合には、白い背景と赤い斑点は対照をなすが、赤い斑点同士は融合してひとまとめにされるのである。<sup>(2)</sup>ところでフッサールによると、ヒュレー野を支配するこの連合的発生の現象は「内的時間的意識の綜合を基礎としている」<sup>(3)</sup>のであり、換言すれば、流れることの原初的生を基礎としていのである。従ってヒュレーは、すでに時間化をこおむっているのであり、時間様相を付与されているのである。故に、ヒュレーによって、流れることの原構造を明らかにすることは、この原構造が非時間的であることから、不可能なのである。以上のことから予想されることは、原ヒュレーが、

ヒュレーの基礎であり、かつ非時間的であるということである。<sup>(4)</sup>我々は、ヒュレーの基礎を問うために、ヒュレー（感覚）の受容器官である身体（Leib）を吟味しなければならない。

身体現象は、一方で、空間内の諸々の事物の一つである身体物体（Körper）であると同時に、他方で、周囲世界を現出せしめる条件として機能するという二重現象である。この二重現象の同時存在を原型的に示すのは、触覚における二重感覚である。例えば手で机に触る場合を考えてみよう。このとき生起する感覚は、一方で手の位置与件<sup>(6)</sup>（触わるもの）であると同時に、他方では手のアスペクト与件<sup>(5)</sup>（触られるもの）でもあるのである。このことを別の少し奇妙な表現でいえば、一方で机のアスペクト与件であると同時に、他方で机の「位置与件」でもある、ということになる。我々が先にのべてきたヒュレーとは、実は、アスペクト与件のみを抽象して捉えたものなのである。したがってアスペクト与件としてのヒュレーは、位置与件とアスペクト与件とを同時に存在せしめている原感覚へ連れ戻されねばならないのであるが、この原感覚こそ原ヒュレーに他ならない。

ところで位置与件とアスペクト与件は、相互否定的にのみ機能する。すなわち感覚が位置与件として機能しているとき、アスペクト与件という契機は否定されているのであり、又その逆でもあるのである。上の例で手が触われているものとして統握されているとき触わるものとしての手が否定されていることをみれば、このことは明らかである。従って原ヒュレーとは、位置与件かアスペクト与件が機能するに先立ち、この両契機を同時に繰りこんでいる原感覚のことなのである。換言すれば原ヒュレーとは、自己をこの両契機へと原初的に差異化させながら（そうでなければ原ヒュレーは位置与件あるいはアスペクト与件として顕現的に機能しない）しかも一であるような原感覚なのである。

原ヒュレーは、自己の原初的差異性を繰展くろひろげることにおいて、一方で現出の条件としての身体を、他方で身体物体を構成する。従って、自己のうちに原初的差異性を繰りこんでいる原ヒュレーにおいては、現出の条件としての身体も身体物体も与えられていないのであって、この両身体を繰りこんだ原身体が告知されているのみである。

一方原ヒュレーは、自らの繰展げにおいて身体構成として機能するが、そればかりではなく、世界構成としても機能するのである。原ヒュレーは、自らの原初的差異性を顕在化することにおいて、アスペクトと与件の野としてのヒュレー野を構造化する（このとき位置と与件は自らを隠している）。この構造化において世界は自らを与えてくるのであり、世界は種々のアスペクトにおいて現出してくるのである。これに対して原ヒュレーにおいては、世界は与えられても現出してもいない。アスペクトと与件が顕現的に構造化されていないからである。しかしながら原ヒュレーは、アスペクトと与件を自らのうちに繰りこんではいる。従って原ヒュレーにおいては、世界のアスペクト的現出、アスペクト的自己能との地盤としての原世界が告知されているのである。このことをフッサールは、原ヒュレーが流れることの原構造の内実を形成していると言明した後で、次のように表現している。「事実（流れることの絶対的事実）のうちに、原質料（原ヒュレー）が、世界性に先立つ存在形式である統一形式において、ちょうどそのように経過する、ということが存する。このことによって、全世界の構成が『本能的に』すでに私に対して予示（Vorzeichen）されているように思われる。その際、可能化する機能は、それ自身、世界の存在のABCすなわち世界の存在の文法（原世界）をあらかじめ（原ヒュレーとして）もっている」(XV, 385, 引用中の丸括弧は筆者の補充である)。

原ヒュレーは、自らを位置と与件とアスペクトと与件に差異化させつつ、しかも両契機を同時に繰りこんでい

るわけであるが、それによって、原身体と原世界が、原ヒュレーにおいて自らを告知するというのが生ずるのである。又既述のように原ヒュレーは、流れることの原構造すなわち非時間的自己差異化において唯一的存在であるという構造の内実を形成するのである。従って、原ヒュレー及び原ヒュレーにおいて自己を告知する原身体と原世界は、この原構造に従うのであり、つまりは自己を非時間的に差異化させつつ唯一的存在である。原ヒュレーと原身体のこのような構造についてはすでにのべておいた。原世界について言うと、それは世界の様々なアスペクト的現出の地盤として、この様々なアスペクト的世界現出を自らのうちに繰りこんでおりながら、やはり地盤として唯一的存在であるということであろう。それ故、原世界すなわち世界存在の文法が、流れること、原ヒュレーにおいて自己を告知するということは、流れることの絶対的自我が唯一性において在る世界を受容するということであって、そこにおいて「世界は在る」より厳密にいえは「唯一の世界が在る」という確信すなわち世界信念が成立するのである。

前章で我々は、受動的自己意識の成立を見、それが流れることの原構造と不即不離の関係にあることを見た。それに対し本章では、世界信念の成立を見、それが流れることの内実を形成する原ヒュレーと不即不離の関係にあることを見た。そして原ヒュレーは原構造の内実を形成するわけであるが、原構造はかえって原ヒュレーを自らの構造にくみ入れるのである。原ヒュレーと原構造は、相互に制約しあっているものである。従って、我々は、受動的自己意識と世界信念が相互に制約しあっている機能していると結論づけることができるのである。フッサールはこのことを次のように表現している。「私は必然的(apodiktisch)に存在しており、そして

世界信念 (Weltglauben) において必然的に存在している」(XV, 385)。

本章では、「他者は在る」という確信が問題になる。そのとき手がかりとなるのは、前章で明らかにされた、流れることの絶対的事実における原世界の自己告知という事態である。原世界のこの自己告知を、フッサールは先の引用にもある通り「全世界 (die ganze Welt) の構成が『本能的に』すでに私に対して予示されている……」。可能化する機能は、それ自身……世界の存在の文法をあらかじめもっている」と言いかえる。流れることの絶対的事実に原世界が自己を告知するということは、この事実が全世界の構成が予示されるということなのである。ところで、流れることの絶対的事実に予示される全世界の構成は、各個人において現実化されることはできない。なぜなら各個人は固有の身体をもち、従って各個人に与えられる世界は、各個人にとってだけ妥当する世界でしかなく、全世界ではありえないからである。それ故、予示される全世界の構成が現実化されるためには、少なくとも各個人同士が共同化することが必要となるのである。

さて、フッサールの相互主観性理論は、相互主観性 (Intersubjektivität) を客観的世界の構成の超越論的條件として説いている。しかもその相互主観性は、モナドの交通 (Commercium) によって形成されるモナド共同体として規定される。従って、フッサールの相互主観性の理論はモナド論として展開されることになる。そこではもちろんモナドの交通の仕方が問題となるが、客観的世界の構成の問題がそれだけで尽くされるわけではない。モナド共同体による客観的世界の構成の問題が後に続かなければならないのである。この構成は三段階に区別されるという。第一段階では、或るモナド群にとって客観的な世界 (故郷世界 (Heimwelt)) が異他的世界 (fremde Welt) と統覚的に対照させられる<sup>6)</sup>。つまりこの段階で問題となる客観性は、或るモナド群の内部におけるそれであって、そのような客観的世界に対してそれ以外の異他的世界は、その故郷世界の外部地平



として現出するにすぎない。第二段階では、故郷世界と異他的世界が等置 (Gleichstellung) される。① 特定のモノイド群にとっての客観的世界を越えたより普遍的な客観的世界の構成をめざす、故郷世界と異他的世界の綜合は決して、故郷世界が外部の異他的世界を内部化するというのではない。それでは故郷世界に対応するモノイドの数が増えたにすぎないからである。従って、異他的世界は、故郷世界と同等の資格で存在しているものとして、故郷世界と共に、しかも異他性という性格を失わず措定されていなければならないのである。このとき両世界は「相容れない統一 (Widerstreitsinheit)」を形成している<sup>(8)</sup>のである。第三段階では、真に客観的な世界すなわち「万人にとっての世界 (Welt für alle)」の「理念的『客観的』綜合」が行われる。② つまり第二段階までの世界構成には、数的に限定された事実的なモノイド共同体が対応することができのに対し、「万人にとっての世界」の相関者として、事実的なモノイド共同体が対応することはできないのである。なぜなら「万人すなわちモノイド総体とは、過去や未来のモノイドをも構成員としてもつものだからである。従って「万人にとっての世界」の構成は、決して閉じられることのない一つの開かれた過程なのである。

そして、フッサールは、この過程を、「万人にとっての世界」を目標理念とした目的論的過程とみている。そしてこの目的論の発生の現場について次のように言う。「事実のうちに、原質料が、世界性に先立つ存在形式である統一形式において、ちょうどそのように経過する、ということが存する。このことによって、全世界の構成が『本能的に』すでに私に対して予示されているように思われる。その際、可能化する機能は、それ自身、世界の存在のABCすなわち世界の存在の文法をあらかじめ持っている。従って、事実のうちに、あらかじめ一つの目的論が生ずるということが含まれている」(XV, 385)。流れることの絶対的事実において目的論が発生するということである。そしてそれは、流れることの絶対的事実に、全世界の構成が、世界存在の文法

（原世界）という形で予示されていることと関わりがある。この関わりは、ここでの全世界が「万人にとっての世界」であることに気付けば明らかになるであろう。流れることの原事実<sup>(10)</sup>に目標理念としての全世界の構成が予示されているからこそ、この事実が目的論の発生の現場なのである。

ところで、流れることの原事実が目標理念としての全世界の構成が予示されるということは、全世界を構成する主体としてのモノド総体が予示されることと相即的である。そして全世界の構成の予示が、原世界の自己告知のことであって、しかもそれが世界信念のことであることは既述の通りである。又、モノド総体が流れることの原事実<sup>(10)</sup>に予示されるということは、流れることの絶対的自我がモノド総体<sup>(10)</sup>を含蓄するということである。そしてこれは、絶対的自我による「他者たちが在る」という意識である。そしてここにおいて「他者は在る」という確信が成立しているのである。かくて世界信念と「他者は在る」という確信は相即的につまり相互制約的に働いていると結論づけることができる。

ところで、我々はこれまで、モノドという概念を厳密に確定しておかなかった。いまやその確定が必要である。その確定を介して、「他者は在る」という確信と受動的自己意識の関係が明らかになるからである。その際重要なポイントになるのは、流れることの原事実とモノドとの関係である。我々はこの関係に関して、二つの異なる理論を見出すことができる。第一は、モノドは、流れることの絶対的自我によって構成されたものであるという理論である。フッサールは次のように言う。「一方でモノドは、構成的統一として存在しており、モノド的世界のモノド的時間において時間化されている（人間主観、動物主観、世界に対して超越論的であるとはいえ）。他方絶対的『エゴ』は非時間的であり、あらゆる時間化と時間、あらゆる存在統一、あらゆる世界の担い手であり、第二の意味においても超越論的である」(XV, 587)。第二の理論は、ラントグレーベの次の

言葉に典型的に示されている。「この絶対的事実は、その統一の根拠を自己自身のうちにのみもつ故に、フッサールはそれをモナドとして特徴づけた。というのは、ライプニッツの定義によれば、モナドは『その統一の根拠をそれ自身のうちにもつもの』だからである」<sup>(1)</sup>。以上の二つの理論は、フッサール自身の記述にその源をもつ。フッサール著作集第十五巻『相互主観性の現象学』後半に収められている諸草稿に、以上の二つの理論に対応する相反する二方向の記述が見られるのである。

第一の理論の問題点は、それに従うとき、他者の自我が、私の自我の変様にすぎないことになってしまうことである。第一の理論における他者の自我の成立状況は次の通りである。すなわち「私は絶対的な具体的自我から、私に対して存在する多くの自我を確証しつつ、第一の基づけるものとして、私の『固有の』自我を獲得し、そこから他の自我を獲得する」(XV, 587)のである。このとき他者の自我は、私の自我の変様として、既知のものという性格をもたざるをえない。そしてそのときに失わざるをえないのは、他者の未知性である。第一の理論には更に問題がある。フッサール自身、先に第一の理論として引用しておいた文章に続けて次のように自問している。「しかし、これでいいのか。この種のモナド論は正当性をもちえるのか。私すなわち生ける現在の絶対的自我が、この現在から他者をも解釈 (Explication) によってはじめて取り出すとはいえ、私はそれにもかかわらず、再び、私の原初的な生ける現在への還元を、他者の他者による生ける現在への還元から区別する必要はないのか」(XV, 587)。ここにおいて、フッサールは、他者が、絶対的自我の解釈によってはじめて取り出されることは認めながら、なお生ける現在つまり流れることの絶対的事実の次元で自他の区別があるのではないかと問うているのである。第一の理論においてはこの自他の区別は存在しない。私が還元によって到達する流れることの絶対的事実のみが存在し、他者が還元によって到達する絶対的事実は排除されているので

ある。ということとは第一の理論では、私と他者は等価ではない、他者は二次的なものにすぎないということである。この問題点にフッサールは気付き、前述のような自問をしたのである。

さて、フッサールはこの自問に対し次のように自答している。「従って私は再び次のことに立ち帰る。すなわち、私の原初的エゴは原初的諸エゴの『無限性』を含蓄しているものであり、それら原初的諸エゴの各々は、他のそれぞれの原初的エゴを含蓄しているのであり、そして自らまさしくこの無限性を含蓄しているのである。そしてその中には、あらゆる原初的エゴを含蓄している私の原初的エゴも含まれているのである……あらゆる考えられる限りの意味におけるすべての存在者は私のうちに存する――全体を全にして一なるもの (All-Einheit) として可能にする目的論的調和をともなつて。しかしあらゆる他者は、無限性というその総体性において私のうちに存しているのであり、そしてあらゆる意味における一切の存在者を自らのうちに含蓄しているものとして、私のうちに存しているのである――この点であらゆる他者は私と等価である」(XV, 587f)。「原初的エゴ」とは流れることの絶対的事実のことであるが、フッサールはここで、この原初的エゴに「私の」という所有代名詞を冠している。つまり原初的エゴすなわち流れることの絶対的事実に自他の区別をつけているのである。そしてこの次元での私と他者を等価とみなしている。私の原初的エゴと他者の原初的エゴは、それぞれ原初的諸エゴの無限性を含蓄し (implizieren) ており、かつ私の原初的エゴは他者の原初的エゴを、他者の原初的エゴは私の原初的エゴを、そのようなものとして――原初的諸エゴの無限性を含蓄するものとして――含蓄しているのである。<sup>(12)</sup> そういう点で、私の原初的エゴと他者の原初的エゴは等価なのである。フッサールはこうして、モナド概念に関する第一の理論から第二の理論へ移行するのである。原初的エゴすなわち流れることの絶対的事実……がモナドであるということがここで言われているのである。

第二の理論にも問題はある。それは、第二の理論に従うとき、原初的エゴの唯一性が失われはしないかということがある。しかしこれは杞憂にすぎない。原初的エゴは、原初的諸エゴの無限性を含蓄することにおいて唯一性を保持しているのである。なぜなら原初的諸エゴの無限性が唯一的だからである。<sup>(13)</sup>この原初的エゴが原初的諸エゴの無限性(モナド総体)を含蓄すること、我々はすでに、流れることの原事実におけるモナド総体の予示といった表現によって述べておいた。いまやこの原事実がモナドとして捉えられるのである。従って、流れることの原構造すなわち自己を非時間的に複数化させつつ唯一的であるという構造は、モナドの構造なのである。又、原初的エゴが原初的諸エゴの無限性を含蓄することは、モナドがモナド総体を含蓄するということなのである。

ところで、モナドがモナド総体を含蓄することにおいて、モナドは、同時に相反する二つの方向で、自己を理解する。一方でモナドは自己を唯一性において理解する。というのもモナドはこのとき自己を、唯一的であるモナド総体が機能する場所として理解しているからである。他方でモナドは自己を「他者たちのうちの一人(einer unter den Anderen)」としてすなわちモナド総体の一員として理解する。このときモナドにはモナド総体への帰属意識が働いているのである。

ここで第一章でみた受動的自己意識が、唯一的な流れることにおける自己の自己に対する自己告知のことであつたことを思いおこしてみよう。つまり受動的自己意識は、自己の唯一性に基づく意識なのである。従って、それは、モナドが自己を唯一性において理解するとき成立している意識なのである。そして「他者は在る」という確信が、モナドが自己をモナド総体の一員として理解するとき成立している意識であるということは言うまでもない。従って、受動的自己意識と「他者は在る」という確信は、相互否定的ではあるがモナド総体とい

う媒体を介して相互に依属しあっているのである。

我々はこのに「私は在る」、「世界は在る」、「他者は在る」という確信が互いに制約しあって機能していることを明らかにすることができたのである。

#### 四

現象学が究極的に開示する流れることの原事実は、こうして、モナドとして捉えられるのであり、従って、その次元のロゴスはモナドのロゴスであり、モナドのロゴス（＝モナド論）とは、モナドとモナドの関係である。一一のモナドは事実上互いに異なっている。しかし一一のモナドはモナド総体つまり一切を含蓄している故に、一一のモナドは即一切という点で互いに同一である。つまり一一のモナドは、互いに同一であると同時に互いに差異的なのである。そしてモナドとモナドのこのような関係は、モナドとモナド総体の関係によって支えられている。すなわち即一切という関係こそが、モナドとモナドの関係のロゴスなのである。かくして現象学が究極的に開示する次元のロゴスは、即一切という関係に貫かれているのであり、現象学的還元が我々をこのような次元に連れていくからこそ、フッサールは、この還元を「本質的に完全な人格の変化を惹き起こすような力さえあり、その変化はさしあたり宗教的回心とも比べられるようなものであるが、しかしそれを超えて、人類そのものに課せられている最も偉大な実存の変化という意味さえひそめていたようなものなのである」(VI, 140)と言っているのである。

フッサール著作集(Husserliana)からの引用は、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で本文中に記した。

- (1) 本稿は、一九八七年五月二四日、日本哲学会で研究発表した原稿に手を加えたものである。
- (2) Husserl, E.: *Erfahrung und Urteil*, Hrsg. von Landgrebe, L. Felix Meiner 1985 S.76  
ebenda S.78
- (3) 原(U)とこう接頭辞は、それが冠せられてくる事象が非時間的次元で機能していることを示すために使用される。以下本論文中に出づける原はすべてこの意味である。
- (4) Vgl. Claesges, U.: *Edmund Husserls Theorie der Raumkonstitution*, *Phaenomenologica* Bd.19 1964 §12
- (5) Meist, K.R.: *Monadologische Intersubjektivität zum Konstitutionsproblem von Welt und Geschichte bei Husserl*, in *Zeitschrift für philosophische Forschung* B34, Heft 4, 1980 S.575
- (6) Meist, a.a.O. S.576  
ebenda
- (7) Meist, a.a.O. S.578
- (8) 流れることの絶対的事実のこと。原の意味については註⑨参照。
- (9) Landgrebe, L.: *Reduktion und Monadologie – die umstrittenen Grundbegriffe von Husserls Phaenomenologie*, in: *Faktizität und Individuation*, Felix Meiner 1982 S.100
- (10) 原初的エゴ相互間のこのちがな関係が「フッサールは、志向的相互内在 (Ineinander) と呼ぶ、それは「形而上学的『原事実』(XV, 366) をねんじ語で。」
- (11) 「内的に唯一的なキヌミ終極」(XV, 666)